

吃音ありのままの姿で

小2女兒の家族 正しい理解願う

その人にとっては普通の話し方

「きちんと理解してほしい病気があります。吃音という言語障害です」。長野市の女性(57)が、本紙「声のチカラ」(コエチカ)取材班にそんな声を寄せた。孫の小学2年女児(7)には、言葉がつかえたり出にくかったりする症状があるという。アメリカの新大統領に就任したジョー・バイデン氏も少年時代は吃音に悩み、克服に努めたとされる。吃音は抑えようとすると悪化するとされ、そのまま話せる環境づくりが大切だが、世の中の理解は十分に進んでいない。



「吃音はその人にとって普通の話し方」。言語聴覚士の内藤さんの説明を聴く諏訪市城北小学校の子どもたち。昨年12月17日、諏訪市

(宮沢 久記)

母親(31)によると、娘は2歳の時、突然、吃音の一つで語頭の音を繰り返す「連発」で話し始めた。「朝起きたら急に『ママ、ママ、ママ』って」。食事中にうまく話せず体が力が入り、弾みで動かし



た頭を食卓にぶつけたこともあったという。5年たった今は症状が比較的落ち着き、話しづらい言葉は言い換えるなど自分でコン

吃音 語頭の音を繰り返す「連発」、あるいは「あー」を「あーい」と伸ばす「伸発」、最初の音が滑らかに出ないためか「ん」と伸ばす「伸ん」といった症状がある。声を出そうと体を動かして弾みをつけるなどの「随伴症状」を伴うこともある。原因は特定されておらず、確立された治療法はないとされる。2〜5歳ごろに約100人に5人の割合で発症するといわれ、多くは自然に消えるが、100人に1人程度は大人になっても症状が続く。

「あー」と伸ばす「伸ん」といった症状がある。声を出そうと体を動かして弾みをつけるなどの「随伴症状」を伴うこともある。原因は特定されておらず、確立された治療法はないとされる。2〜5歳ごろに約100人に5人の割合で発症するといわれ、多くは自然に消えるが、100人に1人程度は大人になっても症状が続く。

娘が幼稚園に通っていたから事情を聞いて教職員向けに吃音についての講習会などを開いた。女児と同じ幼稚園出身で吃音や女児の話し方を理解している友だちも多く、

県内学校現場 特性学ぶ動き

県内では吃音の特性などを学ぶ機会を設ける自治体もあるが、まだ一部。そんな中でも学校現場に入って吃音の特性などを説明し、理解を促げる活動をしている言語聴覚士がいる。松本市の内藤麻子さん(51)もその一人だ。

言語聴覚士ら活動

吃音の症状がある児童がおり、家族から相談を受けた内藤さんが学ぶ機会を設けるよう働き掛けた。この児童はクラスメートの前で「どもりながら話すのが私の話し方です」と伝え、そして続けた。「吃音を不思議そうにしてる人がいたら教えてあげてください」。クラスの男児は話を聞いて「あ、あ、あ」と言っているのが普通なんだねと話した。内藤さんは「治さないといい

自治体独自の研修も

独自の力を入れる自治体もある。東御市教委は2017年、東御市民病院「こはの外来」の言語聴覚士、餅田亜希子さん(53)を講師に、地域の教職員や保育士向けに研修会を始めた。現在は上田市教委とも連携して受講を呼び掛けており、延べ約700人が参加した。教育現場では、理解不足もあって「様子を見よう」という対応になりがちという。餅田さんは、話しづらさが増して不登校などにもつながりかねないとし「話し方の違いを知って認め合えない教育が必要」と訴えている。

情報お寄せください

友だちに登録

LINE

特設サイトはこちら

信毎 コエチカ

母親は「すぐ助かってほしい」と話す。それでもこの先、女児の家族にとっては「中学や高校でもきめ細やかな対応をしてくれるのか」との不安は残る。まずは吃音への理解が進み、人には違いがあると学べる環境が整うよう願っている。